

---

# デッドオブオンライン

扉。

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

デッドオブオンライン

### 【Nコード】

N9155Z

### 【作者名】

扉。

### 【あらすじ】

世界初VRMMOゲーム『デッドオブオンライン』。

このゲームに当選した主人公、椎名 夜宵はテストユーザーとしてログインした。

しかし、ゲーム開始から数時間後、システムの不具合を感じたプレイヤー達は

ゲーム マスターから『ログアウト不可』と『この世界で命を落とすと死ぬ』という驚愕の事実を知る。

クリアは100面までの攻略。

命を懸けるか、永遠にゲームの世界にとどまるのか。  
運命を掛けたゲームの始まりであった。

椎名 夜宵 / Night の決断は!!

2年後、ナイトはまだ、ゲームの中にいた。  
ただいま、2年後編突入。

## E p o プロローグ

2年前

「デッド・オブ・オンライン」

世界でトップと称されるゲーム会社が開発した新作となる、VR MMOゲームである。

発表の時点でネット上の噂となり、ひと時は社会現象にまでなるとTVでも紹介していたほどだ。

何しろ、実際に仮想空間へと行くことが出来るゲームだ。

VR MMOゲームというのは、作り上げるのは不可能とまで言われたのだが、世界一と称されるゲーム会社が数十年かけて作り上げたと言う。

そして、今宵 テストユーザーに見事当選した俺、椎名しゅうなま 夜宵よよはゲーム好きだった。別に人好き会いが嫌いとかではなく、ただ単にはまってしまったと言うだけだ。

当たった瞬間は叫び、妹にこっ酷く叱られたのだがその辺は許してやろう。

お兄ちゃんは心の広い人で良かったな、我が妹よ！！

抽選に当たった俺は陽気に会場までの電車に乗り込んでワクワクと緊張を高めていた。

電車にユラユラと揺れながら目的の会場までの時間を過ごしてい

ると。

「自分もテストユーザーか？」

隣に座っていた少年がそう言うてきた。俺はそいつの方を向くと

「ああ、お前もテストユーザーなのか？」

「そうや。ワイはこの為にわざわざ大阪から来たんやでえ」

「その妙にウザったいのは大阪弁のせいか」

「大阪弁をバカにしたらあかんぞ！！ 全大阪人を敵に回すでえ」

「はいはい。で、お前誰だ？」

少年はぼかーんと俺の方を見ると、アハハと陽気に笑って自己紹介をし始める。

「ワイは龍吾 来栖くわすし 龍吾りゅうごや、よろしゅうなあ」

「ああ、俺は椎名 夜宵だ」

「椎名 夜宵……なんか、ごつつカツコいいな。ワイの名前と交換して」

「嫌だ」

「つれないなあ」

関西弁少年、来栖は気さくな奴っぽい。

こう言う奴が、いい成績を収めることも少くないな……

「なあ アンさんもワイらと組まへんか？」

「組む？」

「そうや。ワイ、テストユーザーに当たった人、3人くらいと丁度知り合いで組もうって話してた所やねん」

「ふーん」

ああ、成るほど。

ふむ。それは悪くない話だろう。

「気が向いたらな」

「ありがとな。椎名は話しやすくてよかったわ」

「話しやすい？」

「ああ、さっきも別の人を誘ったんやけど・・・」

来栖はそう言って電車の奥の人を指した。

そこには白髪の少年が眠っているようにして座っている。

「あの人、何度話しかけても無視や、無視」

「そりゃあ、寝てるからだろ？」

「そうとは限らへんでえ。ワイが思うにあいつは『ソロプレイヤー』  
や」

「ソロプレイヤーね」

その言葉は良く知っていた。

ソロプレイヤー

どんな状況下の中でも1人でクリアしていく、いわば真の強さを  
求めている人。

こういう人が大体、1番初めにクリアしていく。

しかし、ソロプレイヤーは仲間がいない為、援護や回復などが出  
来ず多くのソロプレイヤーは早い段階であきらめていく。

「まあ、あいつもテストユーザーだろ」

「そうやな、面白くなりそうや」

俺と来栖は【始まりの街】と言う、最初の街で待ち合わせということになった。

用意された部屋へと1人ずつ入り、そこにぼつんとある椅子に腰をかける。

目の前にはヘルメットのようなものが置いてあり、それを被ると白い文字でこう綴られていた。

ユーザーを確認。

デッド オブ オンライン

G a m e s t a r t

## EP1 ユーザー

User nameを選択してください。

User name:..Nightht

User dataを習得中.....

習得完了しました。

初期装備を選択してください。

剣・太刀・大剣・双剣・杖

装備『剣』を選択。

タイプ『剣士』

こちらの設定でよろしいですか？

はい

必要情報を確認……完了しました。

User name 『Nigatt』さん

『デッドオブオンライン』へログインを開始します。

光が差し込んできた。

俺は自然と目を開ける。

そこにあつた景色は 普段では見られないであろう城内らしき場所であつた。

周りを見渡す限りの人、人、人だらけだ。

どうやら、ここが『始まりの街』らしい。

『街』ってより『城』だと思つのは俺だけであろうか？

俺は自分の格好を見た。

「なんか……………全体的に黒すぎだろ？」

全身黒。

黒のブーツに黒のズボン。

そして黒のシャツに黒のネクタイ。

ごく丁寧に黒のマントまで羽織つていた。

唯一黒ではない部分は両肩からズボンに向けての2本の線と横を通る線のみ。

「なんですか？ あれか、いじめか」

そんなことを呟いていると、誰かに肩を叩かれた。

そちらの方へ目を向けると、

「お。元気しとつたか。椎名……………ん？ この世界では『ナイト』か」

「お前、誰……………もしかして、来栖か？」  
「そうそう。来栖や来栖。なんか、ごっついでかいバンダナまかれ  
てよー前が見えんわ」

頭に巻かれたバンダナを上直す来栖。  
その腰には『太刀』があった。

「なんか、ナイトとワイじゃ姿全く違うな」  
「……………ってか、なんで俺のユーザー名わかるんだ？」  
「あれ？ 知らんの？ チュートリアルみなかったん？」  
「チュートリアル……………いや、そんなのは無かったが」  
「まあいい。左手にブレスレットあるやろ？」  
「ああ」  
「そのブレスレットに意識を込めるんや」  
「意識を込めるって あ、出来た」

ブオンと音と共に目の前に薄い画面が表示された。  
そこには『装備』『アイテム』『容姿』…などが書いてある。

「な、わかりやすいやろ？」  
「ああ。と、いうよりこの世界でも顔は変わらないんだな」  
「そうやな。ワイはこの顔結構気に入ってるからかまわへんけどな」  
「まあ」

俺も別に顔に不自由はしていない。  
少し女顔ってのが少し気に入らないが……………と、いうよりこの服に  
ついて聞いたほしい。  
それより、何故、来栖……………あ、この世界だと『クルス』か  
名前はどうした、名前は。

「ワイの服、カラフルでいいやる？」

「モンスターにあっさり見つかって死んでまえ」

「そない、つれないこと言うなよ」

そんなこんなで俺は来栖と少し戦いに行ってみるようになった。

あれから数時間、どちらかが死んでは街へ戻って回復し、また戦闘をしに行くと言う、現実的レベル上げをしていた。

「クルス」

「なんや、ナイト」

「お前、知り合いがどうか言っただけか？」

「ああ、それならかまへんよ。ワイのフレンドになってるさかい。いつでも連絡可能や」

「フレンド？」

「そうや、画面だしてみい」

俺は徐に画面をだす。

画面を下へスクロールしていくと、『友達』という項目があった。

「それでワイが申請書を送る………」と

クルスはメールで何かを送つたらしい。  
しばらくすると、俺の画面に『クルス』と大きく描かれたメール  
が送られてきた。

「中、開いてみい」

メールの中を開くとクルスが友達申請をしています。許可します  
か？

YES

NO

と、文字が書かれていた。

俺はためらいなくYESのボタンを押す。

すると、画面は光って次の途端『友達』の項目に『クルス』が登  
録された。

「この友達申請には得が合つてな。どんなに離れていても通信が取  
れる」

「なるほど、それで俺と居ても平気なわけか……」

「そう。後、申請出来るのは互いに画面を開いている状態で2m以  
内や」

「そうか……」

「まあ、チュートリアルに書いてあるけどな」

カハハと笑いだすクルス。

俺は初めての『友達』を得た。

あれから随分と時間が経って、この場所ではもう死なないくらいにレベルがあがった。

「一旦、街に戻るか」

「それもそうだな」

俺達は剣を戻すとゆっくりと街へと向かって歩いて行った。

現在、街で起こっている騒ぎなどまだ知らなかった。

EP2 ログアウト不可(前書き)

椎名 夜宵 / Night

> i 3 7 9 3 3 | 3 8 8 4 <

上手く描けねえ。

## Ep2 ログアウト不可

ピピィッ

クルスは画面を開いた。

俺は横から覗き込むと、そこには高校生であると予想される少年がせつぱつまった表情で何かを伝えようとしていた。

「クルス」

「こいつはワイの仲間や、心配すな。それよりも・・・」

クルスは冷静にその人に対して、話しかけた。

「どうした？ なにかあったんか？」

「クルス！！ 今、どこにいる」

「どこって……街外れやけど」

「今すぐ戻ってきてくれ！！ Game Master から話があるって！！」

「game master？」

「ああ、なんでもログアウトが出来なくなってるようなんだ！！」

俺はクルスの仲間と言われた途端、画面を開いてログアウトボタンを押した。

しかし、ログアウトは出来ず何も変わらなかった。

「ホントだぞ、クルス……」

「どうせ、バグでも起こしたんやろ？ とにかく街に行ってみるわ」

「ああ、頼んだぞ。俺達は街の中心にいるからな」

通信はそこで切れた。

俺達は目を合わせると、急ぎ足で街へと走って行った。

街へ入ると、絶句した。

目の前の光景が嘘であると信じたかった。

城の手前、広場の中心に体長20mもある巨人が立っていたからだ。

「あれはホログラムや。恐らくゲームメーカーの仕業やろ」

ホログラム？

そう見てみると、うっすらと見えかかっている部分があるのが分かった。

じゃあ、何故、こんなに大きなホログラムを必要とするんだ？

「何か始まったぞ」

俺がそう呟くと、体長20mは在ろうホログラムが喋りだした。

「ああ、聞こえているか。ユーザーの人々よ。私はこのゲーム、デッドオブオンラインを作った責任者の石原だ」

石原。 このゲームを作った創始者。

「簡潔に言おう。 お前達はバーチャルこの世界から出れない」

ここに集まっているであろうテストユーザーの1人が声を上げた。 それに続くように野次が石原めがけて飛んでいく。

「まあ、落ち着け。 面倒な事は嫌いなのだよ。 私は、必要な事だけ言う。 1度だけだ、よく聞いておけよ。 この世界は、仮想空間だが、君達の体は仮想ではない。 この世界での死は、現実での死となる。 HPは、自分の命と同様だ」

淡々と惨い事を言う石原。  
俺達はただ静かに聞いていただけだった。

「後は……………そうだな。 1番の目的を言うのを忘れていた」

1番の目的……………？ なんだ、それは。

「あそこの塔。 みんなの所からでは見えないか……………」

体長20mもある石原はそう言った。

「後で、画像でも貼っておこう。塔、通称。《アースランド》あの塔の最高部、たしか……100面だったかな？100面まで来れたのなら、君達、生き残っている全員を元の世界へ戻してやろう」「100面、そんなの無理だ」

誰かがそう呟いた。

その瞬間、不幸の伝染病のように人へまた人へと移っていく。

「ああ、この世界で死んだら向こうの世界でも死ぬ。これは嘘ではないよ」

「じゃあ向こうの世界にある俺達の体はどうなるんだ!!」

誰かがそう言った。

すると石原は大きいホログラムの手を広げて

「大丈夫、近々、我々が管理している大病院へ君達を輸送させてもらうよ」

「か、家族だって……心配する」

「その辺についても大丈夫だ。テストユーザーの家庭には少なからず1千万の慰謝料を払うつもりだ。金で動かない人間などいないのだからな」

俺はその言葉に怒りを持って、言葉にした。

「ぶっつっざげるなあああ!!!!」

少しざわめきかけていた街は俺の言葉で静けさを戻す。

「金で動かない人間はいない？　ざけんなよ！！　俺の家族をなんだと思っただ！！」

そうだ、そうだ。と周りの声が大きくなる。  
すると、石原は即決にこう答える。

「さあ。私はただ君達に欠けているだけだよ。人生ってやつを」

俺達は何故か、その言葉で静かになってしまった。

「向こうの世界では人を殺せば殺人罪。物を焼けば放火罪。物を壊せば、器物破損罪だ。しかし、どうだろうか？　この世界ならモンスターを殺しても罪に問われる心配はないし人を殺しても、罪にはならない。私は君達を使つて人間の本性を知りたいのだよ！！」

誰も言い返せなかった。

「では、失礼するよ。100面頑張ってくれたまえ」

石原はそう告げると、きらきらと欠片になって消えていった。と、同時に死と隣り合わせのゲームが始まった。

このゲームのタイトル

『dead of online』の意味が分かった気がする。

メールが1通、届いた。

しばらくザワザワと街を覆った。

クルスは思い出したかのように手を叩く。

「そつや、ワイ 待ち合わせしとったんや」

「そう言えば、そう言ってたな」

あの通信をいれた少年も仲間だろうか？

「ナイト、来るか？」

「いや。お前の仲間って言うのは結構な信頼度で結ばれてんだろ？」

「まあ、色々なゲームやつてる仲やからなあ　あ、自分気まずいとか思ってる？　そんなのは全然気にせんでええよ。ワイの仲間達はそんなに気にせんから」

「いや、俺が思っているのは違うよ」

俺は短く告げると、クルスから離れた。

そして、最後に

「短い間だったけど、お前といれて楽しかったぜ」

「そうか！！ 死なないで出会ったらコーヒーでも奢ったるさかい」  
「そんな時はありがたく、御馳走になるよ」

俺はクルスと別れてため息を付いた。

画面を開くと、現在のプレイ時間と最高面数が記録されている。  
どうやら、もう進んでいるらしい。

プレイ時間は10時間ちょっと。

「よしっ！！ レベル上げたら行くか。《アースランドへ》」

俺は頬を叩いて気合を入れると街の外へと踏み込んだ。

### Ep3 黄色髪の少女

あれから数日経ったが一向に面は攻略されず2面止まり。  
俺は始まりの街で宿を取っていた。

ひしひしと伝わってくる。

現実感

結局、ログアウトは出来ず仕舞い。

よし……

落ち着いた。 進もう。

100面を攻略しないと出られないという事実を訊いたがいまいち、実感はわかない。が、しかし進まなくてはその事実が真実だということもわからない。

とにかく、今は進もう。

数日経ったせいか、半数の人は落ち着き始めた。

しかし、その反面 絶対に信じまいとワザと投身自殺をして向こうの世界へ帰ろうと、試みた者もいる。 そのプレイヤーは結局帰ってこなかった。

死んだ者は城の中庭にある石碑にユーザー名が書かれるのである。

昨日、見に行ったところ20・30人は死んでいた。

理由は半数が投身自殺。

もう半数はレベルを上げようとしてモンスターに殺された者だ。

俺は向こうの世界に変える為にも着実に100面へ進まなければ

ならない。

まず手始めに防具を揃えようと思った。

しかし、現在の所持金は2000G この宿、たけえよ。街の外へ出て、モンスターを倒してレベルを上げて、その繰り返しだった。

そして、1つ奇妙な物が俺のメール箱に届いていた。

差出人は『なし』

内容も

『汝の色。理解する時、己は自然と強くなるであらう』

と、昔の手紙のような感じで書かれていた。

色？ なんだ、それは？ と、理解に苦しんだ時間もあったが、そんな暇はないと思い今日もモンスターを刈りに出かける。

宿の屋根の上で街の外へ向かって走るナイトを見ている人物がいた。

「どうよ。アイオ」

「駄目ですね。まだ、気づいていないようだ」

「ふ……。今の内に死んでは困る存在だ。手助けは必要か？」

「否定します。あのプレイヤーはいずれ我々より強い存在になるはず」

「そうか……。それは見ものだ」

紅蓮の髪に啜えタバコの青年と空の色のように青い髪に首元へツドホンを掛けている少女はナイトを見てそう呟いた。

「それにしても眠いな」

「肯定します。朝早くすぎます」

2人はため息を漏らすと、その場を去って行った。

モンスターと戦う事数時間、結構レベルも上がったと思われる。

「はぁ……。はぁ……。疲れたぁ」

草原に横になる俺は流れゆく空を見ながらため息を付いた。  
周りにはモンスターもプレイヤーもいない。

「・・・100面か」

そういつて《アースランド》を眺める。

高すぎて頂上は見えていない。

何処まで行けばいいんだ。

と、その時。どこからか、悲鳴のような声が聞こえた。

俺はとっさに起き上がって辺りを確認すると、遠くの方で小さい少女がモンスターに、襲われていたのだ。

「誰か、助けてくださいー！！」

俺はとっさに助けようと走り出すが、もちろんそんな近い距離ではない。

このまま、行けば少女の元に着く前に殺されてしまう。

「こっとなったら」

俺はそう言うと、画面をだして溜めに溜めたスキルポイントを使った。

割り当てたスキルは【速度スキル】

「割り当て数は」

「30だ！！」

画面に映し出されているポイント30を【速度スキル】に移動させた。

その瞬間、なにかの技が覚えたと思われる効果音が鳴った。

そのままの状態で覚えたての技を叫ぶ。

「《アクセリング》」

俺の周りを風が包み込むように纏った。

そのまま少女の前まで走ってモンスターに蹴りを入れる。

「君、大丈夫か？」

「あ、ありがとう」

「少し離れてろ」

「は、はい」

少女は少し離れた位置でこちらの方を向くと、俺は腰にある剣を構えた。

モンスターは妙に荒立っている。

「はっ！！ ザコ獣が俺に勝てるんでも」

このモンスターはこの場所で何度も、何十、ヘタしたら何百と戦ってきた敵だ。

負けるはずはない。

「うおおおおおお！！！」

猛突進してくる獣。

俺は剣を構えて、ぶつかると同時に横に避けると、獣の背後に回り込み一刀両断。

獣は欠片となって消えていった。

「大丈夫かい？」

「あ、はい。た、助けさせていただいてありがとうございます」

少女は畏まった様子で俺にペコペコとお辞儀をしてくる。

俺は画面をだして、ポーションというアイテムを取り出した。

「君、体力ないだろ？ これでも飲んでおいた方がいいよ」

「い、いえ。そんな、見ず知らずの方に助けていただいたばかりでなく。回復アイテムなんて……………とんでもないです」

「でも、またモンスターに会ったら、君死ぬよ？」

「そ、それでも……………」

手を横に振っていた少女は下を向いた。俺は画面を操作すると

「君、画面だして見て」

「は、はい。わかりました」

少女は画面を映し出す。

すると、1通の手紙が届いた。

その手紙とは

「これで君と俺はフレンドだ。友達の誠意なら受け取るしかないだろ？」

少女はにまっと笑顔を見せると、画面の認証ボタンを押した。

「あ、ありがとうございます！！」

こうして、クルス以外に初めてフレンドが出来た。

金髪……と、いつより黄色の髪に両側をリボンで結んだツインテール。

見た目は小学生高学年から中学生にかけて。

その少女のユーザー名は

「Yuiです」

「俺はNighthだ。よろしくユイちゃん」

「は、はい。よろしくお願いします」

妙に縮こまったユイは俺の足元にピタッとくっついたまま街中を歩いている。

結構、動きづらい。

「ユ、ユイちゃん………ちょっと動きづらいんだけど」

「で、でも………こんな人込みの中にいたらユイはぐれちゃいます」

「でも………結構歩いたけど、全く進まないんだよね」

「ご、ごめんなさい」

シユンと肩身を縮めるユイ。

俺は頭を掻くとユイの手を繋ぐ。

「あ、な、ナイトさん!？」

「これなら、はぐれないでしょ？」

「は、はい……………」

プシューウと何かが沸騰する音が聞こえたのだが……

まあ、とにかく俺は1度自分の部屋に連れていくことにした。

## Ep4 攻略

俺の部屋にユイを呼ぶと妙に緊張しているようだった。

「あ、あの……ユイ。お、男の人の家に入るの初めてで……」

「まあ、変に緊張しなくても。この部屋はその内売り払うつもりだから」

「え！？ ってことは……」

「うん。俺はそろそろ上に行こうと思って」

別に売り払う必要はない。

どの面へ行っても転移扉ワープゲートと言う、魔法を持っていれば1度言った面の街はいつでも行き来可能である。

「それは残念です……」

「ま、いつまでもここにいちゃあクリアなんて不可能だからさ」

「そ、そうですね」

にや笑いをしているのがわかるユイ。

どうも俺が初めてのフレンドだったらしく、とても悔やんでいた。

「で、でもフレンドならいつでも会話とか出来るし……」

「ユイ。1人でとても寂しかったです。ここ数日でいくつもギルドは回ったんですが気の会う人がいなくて」

少し涙声になっているユイ。そうだろう。

中学生くらいのプレイヤーは少ない。

それも女の子となったら全体の1割くらいしかいないだろう。

その中で見つけるとなっては至難の業だ。

「俺が気の会っ子……………探してやるよ」

「…え？」

「ユイちゃんが気の会っ子が出来たら俺はここから去る。それならどうだ？」

「そ、それなら……………」

胸に手を当てるユイちゃんは少し誰かに似ていた。

「じゃあ決まりだ。今から、中学生ユーザーが所属しているギルドを探しに行くぞ」

「あ、はい!!」

俺とユイちゃんは一物の不安も残しながら部屋をでた。

ギルドとは『ソロプレイヤー』では、心細いユーザーが複数人で、集まり集団で狩りをおこなうという場所である。

伝言板などにはギルド募集の紙が貼ってあったり、街中で勧誘したりと意外と真剣なのである。

俺はもちろんギルドに入る気はないと思うがな。  
そうこうしている内に俺とユイちゃんは掲示板前までたどり着いた。

「あ、あの・・・」

「あつた？」

「い、いえ。これ……」

ユイちゃんが指を指した髪には、元気な女の子が映っている写真が飾られていた。

俺はこの写真を見た途端、確信する。

「中学生くらいの女の子じゃないか」

「は、はい」

「ここにする？」

「い、一応行ってみましょう」

俺は掲示板にあった紙を破り取って、目的場所の街の中心に向かって進んでいった。

呆気なく、見つかった。

ユイちゃんと、歳が同じくらいの女の子がギルドにはいた。  
そしてすぐに仲良くなった様子だ。

「な、ナイトさん。ありがとうございました」

「いいよ。フレンドなんだから」

「お、お礼がしたいので困った時はいつでも言ってください」

「うん。ありがとね」

最後までオロオロとしていた女の子だったなあと俺はギルドを離れた。

最後まで手を振っていたユイちゃん。  
いつか、あえるといいね。

### 半年後

時間に時間が過ぎ、ただ漠然と日々を過ごしているだけとなっていた。

半年たった今も、状況は変わらず相変わらず《アースランド》の攻略は終わっていない。

変わったことは大きく分けて2つ。

1つ目は『<sup>ノエル</sup>noel』という、ギルドの飛躍的成長。

2つ目は『通り名』を持つ者の出現だ。

着々と進んで行く中で、俺はある光景を見た。

それは17面

ゆらゆらと階段を上がっていくと、銃声が鳴り響く。

俺は警戒しながら、先に進んで行くとキラキラと欠片が宙を舞っている。

「こ、これは」

俺はそう呟くと、奥に1人血だらけで倒れている人がいた。

「だ、大丈夫か!！」

「う……………うう」

体力は残り2 このままでは死んでしまう。

俺は急いで画面を開こうとしたが その手は血だらけで倒れている男に掴まれた。

「な……………」

「注意しろ…………… 白髪の狙撃手<sup>トリガー</sup>に

」

男はそう言うとキラキラと欠片になって消えていった。

白髪の狙撃手?

誰だそれは?

モンスターか？

それとも・・・

ユーザー！？

俺はとっさに近くにあった壁際へと身を寄せる。

あの人が言うには白髪トリガーの狙撃手。  
拳銃トリガー使い

俺にとっては不利だな。

そう思いながら、警戒しながら階段を進んで行くと大きな扉が合った。  
った。

まるでこの先にボスが待ち構えているような

小さく隙間が空いていたのでそこを覗いてみると

白髪の少年が血だらけで立っていた。

足元に見えるのはボスらしき者の死体。

そして、その死体はキラキラと欠片になって消えていった。

瞬間。

白髪の少年と目が合った。

俺はとっさに扉の横に隠れる。

コツ コツ コツと近づいてくる音が聞こえてきた。

俺は剣を握り締めて白髪の少年が出るのを待っていた。

が

いつまで経っても出て来なかった。

それどころか足音、呼吸さえ聞こえなくなり、俺は上に行ったのか？ と、扉をゆっくりと開けた。

刹那

銃声が部屋中に鳴り響く。

俺は【速度スキル】で鍛えた足を使い、なんとか、かわした。

俺は階段側に移動すると扉側には案の定、白髪の少年が立っていた。

右手には真っ白く返り血の付いていない銃を持っていた。

「ボクの攻撃を避けたのはお前が初めてだ。モンスターも人間の中でも」

「アンタは、人を殺したのか？」

「殺したさ。この世界では人を殺しても罪にはならないって言うってだろ？ 1度実践してみたくてさあ。やったら、消えちゃったんだよね。キレイに」

「てめえ！！ 人の命をなんだと思ってるんだ！！」

「・・・人の命？ そんなのは1道具にすぎないよ。ボクの命もお前の命も」

俺はその言葉を聞いた瞬間、何かが壊れた音がしたような気がする。

そして、いつの間にか飛び出していた。

「きなよ。ボクが綺麗に殺してやるよ」

## EP5 白髪の狙撃手

狭いエリアでの遠距離の敵と戦うのは不利である。

俺は剣。

たいして白髪の狙撃手トリガーは拳銃ガンナー使い。

圧倒的に不利だった。

でも、体が怒りにまみれて思わず、飛び込んで言っていた。こっとなったら戦うしかない。

「いいね。いいね。ボクに立ち向かってくる人は初めて見たよ」

「うるせええ！」

声を荒げて、斬りかかるが白髪の狙撃手はいとも簡単にかわした。と、いうよりも…最初から来る位置がわかっていたような気がする。

「まずは1発目」

ダンッ

「ぐああああああ」

鈍い銃声が鳴り響く。

俺はとっさに右手を庇い、左手を撃たれた。

HPも少し減っている様子。

まずい…このままだと、死ぬ。

「はあ…はあ」

「おやおや。さっきまでの威勢はどうしたんだ？」

「うるせえ」

「くはは…やっぱり、殺しいもんだ」

白い服を返り血で染めている白髪の狙撃手は銃を天井に向けるとそう言った。

俺は左手から出ている血を止血すると、片手で剣を握った。

剣では十分範囲内だが、どうにも隙がない。

「さあ、もっとボクを楽しませてくれよオ」

「言われなくてもっ!!」

飛び出した。

その距離50mもない、その近距離で俺は【速度スキル】を使った。

「《アクセリング》」

風を纏い、白髪の狙撃手に向かって斬りかかった。

確かに、手ごたえはあった。

剣にも血が付着し、少ないが白髪の狙撃手にもダメージを与えている。

それなのに…

「ぶはああ

ッ!!」

どつという事だ。

俺のHPが……減ってる。

「くははは……いいね、いいね。お前が初めてだ。ボクに攻撃出来た人間は」

「……………」

「簡単な話だ。ボクも使ったんだよ。その《アクセリング》ってやつを」

「なッ!？」

いつ画面を開いたんだ…

全く見えなかったぞ。

「その様子だと、何故画面も見ずに使えたのかって面だな」

く……お見通しってことか。

すると白髪の狙撃手は銃を懐にしまいだした。

何を考えているんだ……

「そうだな……そんじゃあいいこと教えてやる」

「な……何のつもりだ」

「けッ。いいから訊いとけ……それとも今死ぬか？」

朱い瞳が俺をにらむ。

俺は負傷した左手を殴られた腹部を押さえて剣を構えた。

「おいおい。今から死ぬってか？ 大丈夫だ。ボクは今の段階じゃ、

お前は殺さねえよ」

「……そんなの信じられねえよ」

「けッ。そうかい……そうかい。なら、それでいい」

白髪の狙撃手はそう呟くと、俺に伝えるように話を始めた。

「この世界『デッドオブオンライン』にはなあ、すっげえ裏技があるよ。その裏技つてのが、この世界に来たテストユーザーの中で選ばれた12人の奴にしか得られない物なんだよ」

「お前が…その1人だと？」

俺がそう告げ口すると、白髪の狙撃手は笑う。

「そう…そうなんだよ。ボク、当たっちゃったんだよね。その12人の中に…」

「それで…その話が俺に何の関係があんだよ」

「あれれ？ ここまで来てわからない。もしかしてお前、バカ？」

「…成績はいい方じゃなかったな」

「そうかい、そうかい。なら教えてやんよ。お前、あの石原って奴が消えた後に、奇妙なメールが届かなかったか？」

「メール……」

ふと、思い出した。

たしか、あれは石原が去った後、宿で見た物だ…

何故、それをコイツが知っている……あ、まさか！！

「気づいたみてえだな。おめえは選ばれたのさ12人のチート級のプレイヤーによ」

「……そ、そんなわけ……だって、俺はおめえにやられてんだろ？」

「そりゃそうだぜ…ボクとアンタのレベルの違いは一目瞭然だろ？」

言い返せない。

その通りだった。

こいつは確実に俺より1周りも2周りもレベルが高い。

「だからって、俺にその事実を伝える義理はねえだろ？」  
「ちげえんだな。これがまた…ボクは強い奴と戦いてえんだ。だから、その事実を言えばお前はもつと強くなるだろ？ 簡単な理論さ」  
「ここで俺を殺さなかつたら…いずれお前を殺しに行くぞ？」  
「来いよ、来てみるよ！！ ボクを楽しませてくれよ！！」

俺は叫ぶ白髪の狙撃手から少し離れて構えだす。  
しかし、白髪の狙撃手は何もせずに笑っている。

「それと確証はもう一つ…お前、チュートリアル受けたか？」  
「……………いや。受けてねえよ」  
「そうかい。そうかい…なら、本物だ」  
「だから、それがどんな意味に……………」

と、その時。  
銃声が鳴った。

「最後に一つ。ボクは画面ディスプレイを出さなかつたんじゃねえ。出したことにお前が気づかない程速かつたつてだけだ」

白髪の狙撃手は俺に向かって銃口を向けた。  
俺は剣を持ってガード体制を取る。

「これで生きてたら、お前を見逃してやるよオ」  
そんな事を呟くと、画面を映し出した。  
俺も最近、覚えたこの技を使ってみようと、画面を開く。

「ボクの名は『A v i アヴィ』」

「俺は…ナイトだああああ！！」

画面を押すと、走り出す。

左手は、もう動かない。

腹部も痛い。

上手く走れない。

でも、殺らなきゃ……殺られる。

「《………6式………シヨットツ！！》」

「《二段漸にだんきり》

ツ！！………》」

17面の層は多大な爆音と共に勝負は終わった。

「……………」

17面の層に立っていた人物は……………」

「けッ。今のコイツじゃまったく面白くねえな」

白髪の狙撃手      アヴィだった。

アヴィは首を曲げると、拳銃を懐にしまう。  
それにしても……………」

「ボクのHPをこんなに減らすとは…いい度胸してんじゃねえか」

アヴィは自分のHPが書いてある真上を見る。

そこに残されていたHPは残り半分だった。

倒れているナイトを見る。

あちらのHPは残り7

一発、撃ちこめば死ぬ体力だ。

しかし、アヴィはそれを止めた。

「こんな所で死ぬほど野暮じゃねえよな」

そう呟くと気絶しているナイトに向かって

「100面で待ってるぜえ、ナイトさん」

そう言って次の層へ進んで行った。

微かに聞こえる誰かの声。

それを無視してアヴィは進んだ。

## EP6 救援（前書き）

今回で第一章は終わりとなります。

引き続き、デッドオブオンラインをお楽しみください。

## E p 6 救援

目を覚ましたら、冷たい床ではなかった。

どこか温かく温もりある 誰かの肌のような…

「……ん」

俺はゆっくりと目を開けると、目の前から誰かが覗いていた。

覗いていた人物は俺が目を開けると、騒ぎ出した。

まだ目と耳が完全に機能していないのか、誰なのか何を喋っているのかわからない。

「……さん……さん」

「……ん」

段々、視界と聴覚そして口も動き始めた。

そして、目の前にいた人とは

「だ、大丈夫ですか？ ナイトさん！！」

「……ユ、ユイちゃん？」

「は、はい…わかりますか？」

「…な、なんとか」

「よかったあ………」

胸を降ろすユイちゃん。しかし、ここはどこだ。

それに、なんで目の前にユイがいるのか皆目見当も付かない。

……しばらく考えて俺はある1つの結論にたどり着いた。

「夢っ」

「ゆめえ！？　ち、違いますよ！！　真正正銘、本物のユイです！」

「だって…夢じゃなかったら、目の前にユイちゃんなんて…」

すると急に顔を赤く染め始めたユイちゃん。

俺は完全に回っていない脳で首を傾げて考える。

「……………お、男の人は……………がいったって」

「……………ん？」

「お、男の人は膝枕が1番効果があるって……………」

ん？　ヒザマクラ？

ひざまくら？

膝枕！！

もしかして……………

「……………ユ、ユイちゃん……………この下って……………」

「あ、はい。ユイの膝です」

「純粹すぎるッ……！」

「ええ　！？　ど、どうしたんですか！？　いきなり」

流石に心苦しくなって俺は起き上がることにした。

それにしても……………

「……………」

俺がそう呟くと、さきほどまで膝枕をしていたユイが

「……………」  
『ツマインクキヤミ輝く猫』ギルド本部です」

「……輝く猫？」

「はい。半年前にナイトさんが紹介してくれた……」

「ああ、あそこか。ギルド名まで聞かなかったからわかんなかったわ」

「そうですね……」

俺は起き上がると、ユイちゃんから全部聞いた。

実に半年ぶりの再開だが、そんな余韻に浸るわけにはいかなかった。

あの子の事を……

「ナイトさん……驚いちゃいましたよ。倒れてたんですから！！しかもHP7で」

「あれは……よくわかんねえ敵だった」

「そ、そうなんですか？」

「うん……こんな最初の場所であんなにレベルが高い奴なんてそういないだろ」

「そいつあ、恐らくPKだな」

「……ロ、ロツクさん！！」

「ロツク？」

「輝く猫のリーダーのロツクさんです」

「おお、俺がロツクだ。よろしくな……えっと……」

「ナイトです」

「ナイトか。よろしくな」

「それでPKって？」

プレイヤーキラ

「PK 人が人を殺す奴らだ」

「たしかに……」

あいつは平然と人を殺していた。

俺の攻撃を避けたのは人間もモンスターも初めてと言っていたから、恐らくもう何十人も人を殺しているんだろう。

「狂ってるんだ。そいつらは……」

ロツクはそう呟く。俺は壁に立てかけてあつた自分の剣を持つと、画面を開いた。

「助けてくれたお礼です。丁度、持ち物限界数に達していたので……」

「い、いや。ユイは……あの時のお礼のお返しなので……」

「俺もいらん。勝手にやったまでだ」

「………そうですか」

俺は指を鳴らすと、画面を消した。

そして、俺は2人に礼をするとギルドを出た。

「な、ナイトさん!？」

「ん?」

「ユ、ユイと一緒にこ、このギルドに入りませんか?」

それはユイからの誘いだった。

しかし、俺の答えはとうの前に決まっていた。

「俺はギルドに入る気はないよ」

「な、なんで入らないんですか！！ 確実に1人より大勢の方が…

…」

「そこがいけないんだ。俺のこの半年は無駄だった……」

「何があつたんですか」

「ユイちゃんに言うような野暮なもんじゃねえよ」

俺はそう言うと、画面をだした。

「ユイちゃん……」

「はい」

「俺になんて、付きまとわないでしっかりとした人の所で過ごして方がいと思うよ」

「……ユイはナイトさんに初めてプレイヤーとして仲良く接してもらいました。それは今も変わりません だから、ユイはナイトさんを追い続けます」

「そう……おい。ロック」

「ん？ どうした、ナイト」

「ユイちゃんを……頼んだぞ」

「言われなくとも……ユイはもう我々の一因だ。簡単に殺させはしないぞ」

「そうかい……じゃあな。 ワーブゲート 転送扉 15層 《アイマール》」

俺はユイちゃんとロックの姿が見えなくなるまでその街を見ていた。

俺はこの半年間で何も変わらなかった。

壊しちまったんだよ……. . . . . 大切だったものを

そして、時は過ぎて2年後まで話は進む。

## Ep6 救援（後書き）

飛躍しすぎましたかね？

年明けに合わせて2年後にしてみたんですが

なにか、不審な点とかございましたら言ってください。

そして、次回からは第二章の始まりです。

話は進んで2年後。

## EP7 2年後の姿（前書き）

みなさん、あけましておめでと〜いになります。

いきなりですが2年後のお話です。

この2年間の間の物語はその内書いていくつもりですのでよろしく  
！！

## EP7 2年後の姿

冒頭から、こんなに暗い話題になることをお許し願いたい。

結局、2年経つても『D O O』デッドオブオンライン（これが略称）からは出られていない。

2年間で進んだ面は72面

この順調からしていけば、後2年後くらいにはクリアできるんじゃないかと思うかもしれないがそれは間違っている。

最初にテストユーザーとして参加した人達は全員でおよそ2万人対して、2年後今日現在で生き残っているユーザーは8千人だ。すなわち、この2年間で1万2千人のユーザーは死んでいるのだ。

さらに言うと、この1万2千人の内 2千人弱の人達はPKプレイヤーキラーに殺されている。

とても、残酷だ。

俺はアヴィと言う、白髪の狙撃手に出会い、ユイに助けて貰ってその後は着実に淡々と  
面をクリアしていき、何時しか ユーザーは俺の事をこう呼ぶようになった。  
チート級の12人の1人の俺の名前をNightナイトと騎士ナイトに文字つて

ブラックナイト  
漆黒の騎士

俺は只今、47層の大自然漂う《グリーンパーク》にいた。  
理由は簡単。  
野暮用だ。

「それにしても……疲れるな……この森」

・・・

ある人物に頼まれて、この森まで来たのはいいのだが、その人はぐれてしまった。

「俺、【散策スキル】上げてねえから、ヘタしたらこのまま餓死するかも……」

そんな縁起でもないことを簿いていた俺の目の前にモンスターが現れた。

たしか……名前は……

「なんだっけ？ あー！ 思い出した。《キング・タウロス》だ」

目の前にはタウロス　牛頭人身の王冠を被ったモンスターだ。そう呟いていると、《キング・タウロス》は鼻息を粗く上げ、こちらに向かって突進してきた。

「……しゃあねえな。やってやつか」

今にも魂が口の中から出てきそうなへこたれた声で俺はそう言う。と、左腰に指してある剣を抜いた。

俺の剣は1年ほど前にある刀鍛冶に作って貰った特注品オーダーメイドである。

剣を構えて、足に力を入れる。

「ギヤアアアアアアアツ」

《キング・タウロス》の鳴き声が森に響き渡った。俺は画面を開き、ボタンを押す。

「二段斬ツ！！！！！！」

《キング・タウロス》は、俺の横を駆け抜けるように走っていくと、そのままの勢いでキラキラと欠片になって消えた。

俺は《キング・タウロス》が消えたことを確認すると、剣を腰に戻す。

そして、俺は大きな欠伸をした。

「……まったく、どこ行ったんだよ」

そう呟くと、俺は再び森の中へ入って行った。

結局、半日に渡って《グリーンパーク》を散策したのだが結局見  
つからなかった。

俺はため息を付きながら自分の借家である50層へと飛んだ。

「はあ。眠い……」

欠伸をしながら、部屋の扉を開けた。

「あ、ナイトさん。おかえりなさいです」

「ん？ あ、ただいま。って!？ なんでユイがいんだ？」

「少し、この層に用事があったのでナイトさんに挨拶をと思いまし  
て」

「うん。それはわかったけど、何故俺の家の鍵を？」

「それは……秘密ですっ!……!」

うわあーこの子1番謎な部分を隠しやがったよ。

俺は剣を置くと、椅子に座った。

隣にはユイがちょこんと申し訳なさそうに立っている。

「まったく変わんないな、ユイは」  
「も。いつまでも子ども扱いしないでくださいよ。もう十分大人ですッ!!!」

「それで、大人かあ……ちょっと無理があるね」  
「ううう……やっぱり、そう思いますか」

ユイは下を向いた。

この2年間、偶にユイには会っていたが背丈も何もかも2年前と同じだった。

それとも、ゲームの中ではやっぱり成長しないってことなのか？

「ナイトさんだって、全く変わってないですよ!!!」

「俺はいつまでも、このままの方がいいんだよ」

俺はそう言って少し優越感を味わった。

ユイは相変わらず、小学6年みたいな背丈で変わらず黄色髪のツインテールであった。

それでも、この2年で2人共随分変わったと思う。  
外見は変わってなくとも、内面は何歳も上である。  
そんな気もしなくはない。

「ユイ、ロックさんは元気か？」

「はい。ロックさんもギルドの全員、元気に生き残っています!!」

「……そうか。珍しいよな、ギルド全員で生き残ってるっていうのは」

「そうですね。昔から関わり合ったギルドは次々無くなっています」

ユイの入っているギルド『シャインキャッツ輝く猫』のメンバー誰1人欠けずここまで来ている。ある意味、凄い。それも、ロックの強さのおかげかもしれない。

「それで用事ってのは終わったのか？」  
「え、いえ……それがまだ終わってなくて……」

ユイは手をモジモジとし始めた。  
俺は首を傾げる。

「あ、あの……」  
「ん？」

「この層に、『雷閃』<sup>らいせん</sup>って呼ばれている人がいるって聞いたんですけど……」

「……ん？ 雷閃ねえ」  
「知りませんか？」

「いや、知ってるには、知ってるよ」

「そうですか！！ なら、教えて欲しんですけど」  
「いいけど、その『雷閃』にどんな用事なの？」

「それは……まあ後々」  
「後々ねえ……」

俺はそう呟くと、イスから立ち上がりユイの頭を撫でる。  
ユイは少し抵抗があったようだが、しばらくすると安楽の顔を見せた。

「いいだろう。明日、行ってみるか」

「え！？ いいんですか……！」

「うん。どうせ、明日 そいつに用があるからな」

「ありがとうございます」

ユイは深々と頭を下げる。

俺は『いいよ、別に』と言うと、ユイは頭を上げた。

「では、明日 ここに来ますね」

「ん。それはいいけど、もう遅いから家に泊まっていくといいよ」

「ふえっ！？ いいんですかっ！！！！」

「うん。部屋は余ってるし、ユイがいいならだけど」

「いいです！！ 超いいです！！ むしろ、最初からそう仕向けようと思っていました！！」

「……最後の言葉が妙に気になるのは俺だけか？」

ユイはなんか妙に嬉しがっている。

宿代が浮いたからかな？

と、いうより2年間の間に性格変わった気がする。

そんなことは置いといて、俺は料理を作る為にキッチンへと立った。

今日は、久しぶりに俺の手料理を披露しよう。

EP8 雷閃（前書き）

> i38176 | 3884 <

今回の話と全く関係ありません。

右：椎名 夜宵 / Night 左：不明 / アヴィ

どうですか？ 結構頑張って書いてみました。  
2ショットです

感想、評価、誤字脱字、指摘などお願いします。

次の日

午前7時丁度にユイの画面からアラームが鳴り響く。

ユイは少し寝ぼけながらアラームを止めると目を擦った。

「……う、ここは」

目を擦りながら、考える。

しばらく辺りを見渡していると、昨日の事を次第に思い出している。

(昨日、ナイトさんの家にお泊りしたんだっただ)

そう思うと急に顔が赤く染まっていく。

肌白い手で真っ赤に染まった顔を隠した。

しばらくすると、気も落ち着いてきたのか次第に顔は普段の肌白い顔に戻る。

そしてゆっくりとベッドから降りると、朝早く起きた理由も思い出す。

「そうだった。ナイトさんの寝顔を見に行かなくてわ!!」

ユイはそう呟くと、音を立てないようにドアを開いた。

目の前のソファーには毛布1枚で横になっているナイトの姿があった。

それを見たユイは少し心苦しくなる。

「……ユイの為にソファで寝ているなんて……」

胸をぎゅっと抑える。

しかし、実際は違う。

ナイトはベットで寝るより、ソファで寝た方がいい派なだけである。

だから、妙に小綺麗なベッドの納得も良くと言う事。しかし、ユイは気づいていなかった。

ユイはそっとナイトに近づくと座って、顔を眺めた。

じーっと、何時間にも思えたし何分にも思っただろう。

ほわわあぁっとユイは朗らかな気持ちになり終えた。

そして、時間は8時。

ナイトの画面が開いてアラームが鳴った。

ナイトは上半身を上げると、ユイの方を見て目をぱちくりと瞬きする。

しばらくすると、思い出したかのようにユイの頭を撫でる。

「おはよう……ユイ」

「おはようございます。ナイトさん」

こうして、1人の少女の数少ない楽しみが1つ増えた瞬間だった。

俺とユイは今、ある所にいる。

そう、最強ギルドの『ノエル』の第1支部である。

ここには『雷閃』と呼ばれる人がいる。　　ってか、俺の知り合いだ。

「ここにいますね……………」

「ん、まあ。ここにいなきゃ、あそこにいるんだろっけだな」

「あそこってどこですか？」

「ここにいなかったら、教えてやるよ」

俺はそう告げると、第1支部のドアを4度ノックする。

しばらくすると、ドアがゆっくり開いた。

「……………何すか？」

「ん。ああ、このの支部長に会いたいんだけど」

「……………予約は？」

「ん。してない」

「なら、事前に行ってから来てください。隊長は向こう3日、仕事で」

「あ。君、君。その人はいいから通してください」

と、ドアの向こうから声が聞こえた。

俺は少しドヤ顔風になるとドアから出て来た男は舌打ちをして俺とユイを通す。



硬直した。

なんで、人を招いておいてそいつが

着替えているのか。

「雷閃って女の人だったんですか」

「いや、今そんな状況じゃない。へたしたら俺死ぬ」

プルプルと肩を震わせて顔を真っ赤にする『雷閃』

そして、画面をゆっくりと開くと思いつき叩いた。

その間に俺はユイに

「ユイ、【防御スキル】最大だったよな……今すぐ、守っとけ」

「え……あ、はい」

ユイは言つがまま画面を開いて【防御スキル】を使った。

俺は出来るだけ、ユイから離れて部屋を脱出し走った。

「死になさああああああああああい！……！」

『雷閃』の右手から、雷が飛び出して行き部屋を出て行った雷は誰かを捉えた。

「ぎあああああああッ！……！」

その声は紛れもなく、俺だった。

「俺の唯一のチャームポイントである色白の肌が少し黒くなっただけ？」

「いいじゃない、少しダンディーになったわよ」

「なんで俺の路線がオヤジ系なんだよ」

俺は少し焦げた頬を少し気にしながら話を進める。

「で、今日来た理由は何かしら？ まさか、昨日のあれ？」

「昨日のあれってなんですか？」

「ああ、こいつ。昨日、森の中で迷って俺を見捨てたんだよ」

「見捨ててなんかいないわよ。アンタが急にいなくなるんじゃない。

『あそこに、希少種のモンスターがいるからちよっと狩ってくるって』

「まあ、言ったけどさあ……………」

俺は少し、縮こまる。

対して、『雷閃』はドヤ顔風になって、俺に近づいてくる。

「なら、私に詫びてよ」

「ゴメンナサイ」

「あ、あの……そろそろ、本題いいですか？」

「あ、ごめんね。ナイトくん弄るの楽しいから」

「お前、実はドSだろ？」

いたっ！！ 殴られた。

俺は頬を摩りながら2人との話を訊く。

「率直に言いますと、次の層。75面にいるボスと一緒に退治してほしいんです」

「……いいけど。私達『ノエル』は全面的に動かないわよ」

「いいんですよ。私は『アナタ』に言っているんですから」

ユイのその言葉は妙に力強かった。

俺はその横で頬を摩っている。

『雷閃』はうんうんと頷くと

「で、ナイトくんは行くのかな？」

「ん。いいけど、まだ死にたくないんだけど」

「……大丈夫よ。私が護つてあげるから」

「ユ、ユイもナイトさんを守ります！！」

「いや、冗談だから」

沈黙。

まあ、いいけど。

「そうとなると……後、2人くらいは必要ね。主に戦闘系で」

「援護はユイがやってくれるからいいけど、今回のボスは結構厄介

って訊いてるしな」

「援護なら、任せてください!!」

俺達はしばらく考えると、俺はある人物2人の事を思い出して話を  
をする。

「あ、いい奴2人いた」

「え？ほんと、それ？」

「ん。ああ、俺達と同じ位のレベルで戦闘系だろ？ なら適材適所  
な奴がいる」

「へえ〜。それって私も会ったことある？」

「ん 。 たぶんないと思う。最後にあつたのお前と会う前だ  
し」

「そんな人、まだ生きてるの？」

「大丈夫だろう。片方はともかく、もう1人は俺と張り合っている  
奴だからな」

「そうなんだ……」

「では、その2人に連絡をしてみましよう!!」

「そうするか……」

俺はそう言うと、ディスプレイ画面を開いた。

**EP8 雷閃（後書き）**

さあ、次回は新キャラ登場か？

感想、誤字脱字などお待ちしております。

## EP9 対決(前書き)

感想、誤字脱字、評価、指摘をお願いします。

## EP9 対決

俺は協力をしてくれると思う2人に連絡を取って第1支部をでる。

「ふっ。もう話は終わったのか」

「ん。誰だ、アンタ」

第1支部の門の前に誰かがいた。

ああ、護衛の人が。すっかり忘れてた。

「俺は護衛のナイズだ。覚えておけ、この常識知らずが!!」

「ん。俺、人の名前、覚えるの苦手だから……でも、アンタは俺の名前によく似てるから覚えやすいな」

「似てる？ ナイズにか？」

「ん。俺の名前は

俺が名前を言おうとした時。

第1支部の方からユイト『雷閃』がやってきた。

「お い!! ナイトくん」

「ナイトさん。歩くの速いですよお」

へとへとになりながら走ってくるユイトと手を振りながら走ってくる『雷閃』

すると、護衛は首を傾げて俺に問いかける。

「お前の名前って」

「ああ、俺はナイトだ。じゃあな、護衛さん」

そう言って、俺は門をでた。

ユイはしばらくすると、俺の隣に着いて歩きはじめる。  
しかし、いつまで経っても『雷閃』は来なかった。

「あいつ、何やってんだ？」

「どうやら護衛の人に捕まってしまったようです」

後ろを向くと、護衛と『雷閃』が少しもめているようだった。

「私は大丈夫だって!!」

「しかし、私は護衛なので一緒にさせてもらわないと……」

「だから私は大丈夫だから、いざとなったら助けてくれる人もいる  
し」

そう言って、俺の方を指差す。

ん？ 何故、俺の方に指を指した。

「知りませんよ。あんな、見るからに弱そうな奴。良く生き残って  
いましたね、今まで」

「むー。ナイトくんを知らないとはアナタもここの常識がない  
ようだね」

「知りませんよ。あんな黒ずくめの男」

「なら、ナイトくと『対決』しなさい!!」

「はあ？」

「ナイトくと『対決』して、勝った方が護衛に着く。それなら納  
得いくでしょう」

「……しかし」

「『対決』しないのなら、護衛は解任。ナイトくに護ってもらい  
ます……!」

「………わかりました。ですが、殺しても知りませんよ」

「ふふ……アナタはそんな心配をしなくて結構。自分が死なないようにはしてればいい」  
「？」

やけに『雷閃』は上機嫌だ。

「ナイトくん」

「ん？」

「いきなりだけど、この人と『対決』してくれないかな？」

「……嫌だ」

「つれないなあ。この人がナイトくんと戦って護衛に適しているか判断したいんだって」

「俺は護衛なんてまっぴらごめんだね。自分で行けるだろ」

「十分いけるけど、この人、ノエルの隊長から派遣された人だから融通が利かなくて」

ノエルの隊長か……

また、めんどろな奴が絡んでんな。

「……お願いっ！！ ユイちゃんの為にも」

「なんで、ユイが出てくるんだよ」

「だってえ、ユイちゃんをお願いした頼み事だし」

「お願いしますっ！！ ナイトさんッ！！」

ユイも何故か、頼み込んでいる。

なんだよ、この状況。

「ふ、やっぱりこいつザコプレイヤーじゃないか」

と、護衛が一言俺にも聞こえるように言ってきた。

俺は、はああ、と墮落のため息を付くと『雷閃』に言う。

「なに。勝負方法は？」

「受けてくれるの!？」

「ああ、話が進まんねんじゃ意味がねえからな。それに人待たせてるから」

「ありがとう。ナイトくんつ!!」

『雷閃』はそう言うと、勝負方法を説明する。

勝負方法は『どちらかが、降参と言うまで』か『先に地面に手を付いた方の負け』

街の中でのプレイヤー同士の戦いは珍しくない。

しかし、街の中ではプレイヤーは絶対に死なない。

プレイヤー対プレイヤーは絶対にHP1で踏みとどまる。

「いんですか？ こんなよわつちい奴と……すぐに終わりますよ」

「ナイトさん、あんなこと言われてますけど？」

「ん。いんじゃない？ 言わせておけば」

所変わって、中央広場。

『対決』とあつて野次馬も多い。  
つてか、こんなにこの街にいたんだな。  
気づかなかつた。

「いいのか。止めるなら、今の内だぞ」  
「ん。大丈夫、大丈夫」

護衛は『剣』らしい。

俺と同じタイプだが、持っている剣は結構レベルの低い剣だった。  
俺は剣を抜こうと腰に手を掛けるが

「あ、剣忘れた」  
「「「はああああああああ！？」」「」」

会場中が一齐に叫んだ。

俺は頭を掻きながら、画面を開いた。

「ああ、家に置いてきたわ」  
「ユイが取りに行つてきますー！！」  
「ん。ありがとう」  
「どうすんのよ。アンタの家、結構遠いんでしょ？」  
「ん。この街の入り組んだ場所にある」  
「しょうがない、待っててやる」

護衛は剣を降ろして、余裕の表情。

俺は『雷閃』の方を見ると、指を指した。

「あ、それでいいや」  
「ええ！？ これ？」

指を指したのは『雷閃』の使っている『剣』  
たしか、名前は………忘れた。

「ん。それでいいや」

「ナイトくんがいいなら。いいけど」

そういつて『雷閃』は俺に剣を投げる。  
俺はキャッチすると鞘を抜いた。

「いいのかよ。他人の剣で………」

「ん。いいよ。アンタを倒すぐらい、どんな剣でも大丈夫だ」  
「………そうかい、そうかい」

そして、『雷閃』は中央に立つと手を挙げた。

「勝負」

「初めッ……！」

その言葉と同時に護衛は俺に向かって飛び込んできた。

キンキンと剣と剣が弾きあう音が響く。  
護衛はどんどん迫りながら、剣で斬りつけてくる。  
俺はその攻撃を全て弾いた。

「中々、やんじゃねえか。素人プレイヤーの癖に」  
「あれだろ。アンタ、序盤でやられるキャラだろ」

戦っている最中によく話す敵は真つ先に死ぬ原理。

「なんだとおおおお!!」

縦横無塵に斬りつけてくる護衛の剣筋を全て見えているかの如く避ける。

まあ、実際見えてんだけどさ。

「はあ…はあ…」

「おいおい、まだ始まって5分も経ってねえぞ」

「お前、何時まで逃げてれば気が済むんだ。そんなんじゃ、いつまでも終わらねえぞ」

「んや 逃げてないから。アンタがどれだけ凄い奴か見てみたかっただけ  
まあ、実際そんなに強くないな。お前。俺が最初に  
言った事は強ち間違ってたよ」

その言葉でカチンと来たのか、護衛は画面を開いて叩いた。

その途端、護衛の剣が炎を纏い始める。

「へへ、どうだい。俺の魔法と剣の合成技わあ。びびっちゃったか。  
ははッ」

「……………」

「どうした？ 今なら、土下座して謝ればまだ許してやるぜ」

「んや。お前、やっぱ弱いな」

「んだと、ごらあああああああああ！！！！」

広い中央広場の端と端。

野次馬の手前と手前で話していた俺と護衛。

護衛は怒り狂ったかのように飛び出してくる。

(この剣だと、最悪砕けちまうから使えねえんだよなあ)

俺はそう言って迫りくる護衛を眺める。

距離にして、約50m

迫りくる炎の剣は次第に大きくなっていく。

俺は画面を開いて、あるボタンを押そうとした時。

「ナイトさああああん！！ 受け取ってくださいああああい！！！！」

聞きなれた声と共に俺の剣が目の前に刺さる。

俺は『雷閃』の剣を横に置くと、自分の剣を抜いた。

そして、画面を思いつきり叩いた。

「いくら死なないからって言っても、これはちよいと痛いぜ！！！！」



俺は剣をしまいこむと、倒れこんでいる護衛の方へ向く。

「じゃ、悪いけど、カナは借りてくからな」  
「く……………」

護衛は悔しさのあまり、地面を殴る。

俺はそれを見ないように2人の元へと向かった。

「なんなの、最後のあれ？」  
「なんか、黒い物がばあッて!!」  
「ん。ああ、あれは俺の【隠しスキル】だよ」  
「【隠しスキル】!？」  
「ん。説明すんのはめんどうだから、またその内な」  
「まあ、別にいいけど」

広場から出ようとする護衛の男は立ち上がって俺に向かって叫んでくる。

「素人プレイヤーの癖に『ノエル』に刃向う気が!!」  
「ん。別に刃向ってはないけど」  
「ちよつと、アナタ。それ以上は」  
「てめえが俺に勝てるはずねえだろうが!! バグだ!! そうだ、それがインチキだろ!!」  
「ん。アンタがそれで納得するなら、それで解釈しときなよ」  
「ッ。さっきから、上から目線でうぜえええんだよおおお  
!……!」

剣を拾い上げてこちらに向かって走ってくる。

俺はふああああと欠伸をすると

「ぐあああああッ!!!!」

目の前にいた護衛が謎の炎に包まれた。

「ええ!?! どうなってるの?」

「まったく、君と言う奴は約束の1つも守れないのかい?」

「肯定します。待っている間のパフェ代どうしてくれるんですか?」

「……いや、それは僕が払っただけだね　　まあ、後で君に請求でもするよ」

「んあ。悪い、悪い。ちょっと厄介事で」

「で、この君に剣を向けていた男は誰なんだい?　ああ、またストーカーかい?」

「恋愛のもつれから起こる三角関係でいつも被害に会っていますね、ナイト。まったくつくづく面白い人ですね」

中央広場に突如現れた2人組。

会場中は絶句している。

「ナイトくん……この2人は?」

「ああ、この2人が今回協力してくれる奴らだ」

「奴らって……まあ、僕らの関係なんてそんなもんなのかな」

「否定します。私はナイトの事をそんな風に思っていないせん」

「……僕だけか」

現れた2人は一通りコントのような会話を終えると俺に1言

「さて、早く行こうか『漆黒の騎士』」  
ブラックナイト

「だから、その名前で呼ぶなっつんだろ」

俺とユイとカナは2人の方へ駆け寄ると人込みをかき分けて広場を後にした。

「おいおい、あの黒マントの男って……」

「噂の『漆黒の騎士』だったのか」

「噂だと、ごっついいゴリラのような奴だって聞いてたけど」

5人が去った広場ではザワザワとなっていた。

そんな『漆黒の騎士』に立ち向かって見事に敗北した護衛は倒れていた。

数十分もすると広場には人がいなくなり、護衛だけとなった。

「くっそ……」

声を漏らす、立ち上がる気配はない。  
倒れている護衛に誰かが近づいてくる。

「……なんだよ。笑いに来たのか？」

「……我々はそんな事は致しません。ただ」

「ただ？」

「アナタ、『漆黒の騎士』に勝ちたいですか？」

「当たり前だろ」

「今まで、『雷閃』を独り占めしていたアナタの元から去って行ってしまった……これはいい『エネルギー』になる」

「エネルギー？」

「……なんでもありません。では、これをお飲みください」

「な、なんだこれは？」

「ただの薬ですよ。……ただし、非合法的に作られた物ですが」  
「（ごくっ）……ぐ……ぐがあああああああ」

「く……ははは。失礼ですが、アナタの名前は」

「　　ナイズだ！！」

「……そうですか。では、ナイズ。行きましょう」

経った今まで広場で火だるまになっていた護衛の姿はもう無い。

1人の奇術師も、そこにはいなかった。

『デッドオブオンライン』の謎はまだ多い。

**EP10 紅蒼(前書き)**

前回登場のキャラが明らかに!!!

感想くださいな!!

## Ep10 紅蒼

所変わって、近くの喫茶店のようなお店へ来店。

店員の声と共に近くの5人掛けの席へと腰を降ろす。

俺はメニューを開くと店員を呼んで注文した。

「カフェオレ1つ」

何故、呼び出しておいて呑気に注文してんだと言う顔をしている  
炎使い。

対して、もう片方の方は『あ、私にはチョコレートパフェを』と  
追加注文。

ユイはオロオロしながらメニューを眺めているし、カナに至って  
はずっとこちらを見ている。

「…なんだよ。カナ」

「まだこの2人について説明してもらってないんですけど」

「……ん。そうだったっけか？」

「そうですね」

むー、っと頬を膨らませるカナ。

店員さんは注文を聞き終えて去って行った。

「ユイもこの2人さんのことは知りません」

「まあ、ここ1年であった人達だからな」

「肯定します。正確には102日前です」

「……だそうだ」

「話の内容がさっぱり理解できないんだけど」

すると炎使いが俺に言ってくる。  
どうやらカナとユイは少なからず有名人らしい。

「君が『ノエル』の第1支部隊長のカナだろ？」

そして、君が『輝く猫』の『護り神』と呼ばれているユイだね」

「……驚いた。私のこと知ってるなんて」

「そんな風にな前がついてたなんて知りませんでした」

「……ん。こっちの紹介は省こう。じゃあ、こっちだけでいいな」

そう言っ俺は炎使いを指差す。

「こっちのデカくて啞えたばこで赤髪のイカにも敵つ奴がRen。」

こっちの小さくて青髪のヘッドホンの少女がAioだ」

「……君は僕らにケンカを売っているのかい？」

「否定します。私はその通りなので」

「……おほん。まあ、今回は許してやろう」

まったくかみ合わない2人だ。

何故、この2人がコンビを組んでいるのか出会った当初から疑問に思う。

「レン……さんは魔法を主体にしているんですか？」

「ああ、僕は炎を主体とした魔法でここまで生き残っているよ」

「じゃあ、あの噂の……」

「『紅蓮の魔術師』とは僕のことだよ。まったく、奇妙な通里名を

付けてくれる」

「そうか？ お前にピツタしだろ。すぐ怒って炎を出す所とか」

「……僕が怒るのは生涯、君だけだと思っよ」

「ナイト。レンに好かれてるね」

「こんな、巨漢でヘビースモーカーの男に好かれても嬉しくねえっ

「の」

「……その辺にしておかないと、君もさっきの人のように火だるまになりたいのかい？」

「悪い。悪い。冗談だって 2割ほど」

「……怒るよ。怒ってもいいかな」

レンは立ち上がるがアイオによって阻止される。

そしてアイオは追い打ちをかけるようにレンに言った。

「止めて。ここで何か起こすと一応パートナーの私に迷惑がかかるから」

「……何故、君は『一応』の所を強調したのかな？」

「気にしない、気にしない」

まったく…この2人の世界観はよくわからない。

するとカナはアイオの話題に入った。

あ、もうレンの事はスルーですか。

「アナタは『紅蓮の魔術師』のパートナー？」

「うん。私は『蒼穹の三叉戟』トライデントボセイデンって言う通り名で通っている」

「『蒼穹の三叉戟』って女の人だったんだ」

「よく言われる。こんな凄い名前だから男の人だって」

アイオは少し嬉しそうな表情を浮かべた。

どうやら、アイオとカナは仲良くなりそうな予感がする。

「で、今回僕達を呼び出したのはどんな要件なのかい？」

「ん。今回頼みたいことは第75面にいるボスを協力して倒してほしいってことだ」

「……それを何故僕らに頼むんだい？ 他にも…たとえば、『ノエ

ル』のでも『輝く猫』のメンバーでもいいんじゃないのかな？」  
「今回は色々なことが重なってな。無理なんだよ」

Noelはともかく、輝く猫はよくわからない。

ユイに訊いても『今回は無理らしいので……』の一点張りだ。

「私は全然大丈夫」

「まあ、君が言うなら僕も参加するけど。どんな敵なのか情報は掴んでいるのかい？」

「んや、全然。つてか、まだ75面なんて誰も言っていないでしょ」

「はあ！？ 君は何を言っているんだ！！ まだ開通されていない所をどうやって行けと」

「だ・か・ら 俺達で攻略するんだろ？」

レンは少し黙り込むと、長いため息を付いた。

俺はさきほど来たカフエオレを軽く啜る。

「僕はあまり攻略はし難いんだけどね。僕は中距離だから、どちらかと言うとボス戦のみ有効なんだよ」

「……それはわかってるさ。だから、カナとアイオを連れてきたんだろ？」

「え？ それつて……」

「私の武器は『三叉戟』トライデン 接近戦」

「まあ、私も『レイピア』で接近戦だけれど……」

「ん。俺は『剣』で接近戦」

「ユイは『援護系魔法』で遠距離戦です」

「……僕は『攻撃系魔法』で中距離戦……というわけか」

「ん。その通りだ。これが俺の考えた中で最強ペアだってわけさ」

「なるほど……ナイトくんと私、それとアイオで攻撃。レンさんが援護攻撃。ユイちゃんが防御系の魔法を使うと……」

「なるほど、流石 ナイト。いつも眠たそうな顔をしているわりには頭の回転が速い」

「眠たそうな顔をしているは余計だ」

「女顔？」

「それは言っな」

俺はカフェオレを一気に飲むとレンに言った。

「さて、どうする？ 新しい面に行くのは確かに危険だけど、お前は早く帰りたいんだろ？ あつちの世界に。なら、指をくわえて待っているより自分から行動しなきゃ」

「まったく君はいつも僕の2手3手先に進んでいるね」

「俺は何も変わってないさ。今も昔も……」

「わかった。僕が必要とあればいくらでも行くよ」

「……単純バカとかこの人のことを言うんだよ」

「レンさんは早く帰りたいんですか？」

「ああ、君達もそうだが僕にはね。婚約者がいたんだよ」

「「ええ！？」」

カナとユイは驚愕。

俺はカフェオレを啜って、アイオはパフェのおかわりと食べていた。

「僕は元の世界だったら、今年で20歳なんだよ。18歳になったら結婚しようって言って、彼女からの誕生日プレゼントがこの世界へはいる参加権きじうだったのさ」

「……なんか、悲しいです」

「私も早くクリアしたいと思ったけれど、こんなに切実な人がいたなんて……」

「まあ、今となつてはその彼女もいるかどうかわからないんだけど

ね

「いますよ!! 絶対に!!」

「……ありがとう。ユイ」

「必ず、帰りましょう!!」

そのいい感じの空気をぶっ壊したのがこの2人。

「……ん。美味しいなこのカフェオレ」

「このパフェはピカ1」

「……あの、ナイトくとアイオさん？」

「ん。どうした、カナ」

「今、結構いい話してたんだけど」

「ああ、悪い。俺とアイオは死ぬほどその話聞いてるからさ」

「ぶっちやけ、聞き飽きた」

「それにホントかどうかわからない話に感情移入してもしかたがないしね」

「……まあ、2人は昔からそんな感じだったよ。僕の話聞いて感動してくれた人は君達が初めてだ」

「……それはどうも」

「お気の毒に」

殺伐とした空気が喫茶店に漂っていた。

喫茶店をでた俺達はぶらぶらと帰り道を歩いていた。

「……なんで僕が君達の食べたものを払わないといけないのかな？」  
「ん。悪い、俺、最近 装備変えて金無かったの、忘れてた」  
「私はただ単にレンに奢らせたいと言う衝動に駆られてしまった」  
「君は装備なんて1年中一緒だろお？ そんな衝動は存在しない！」  
「わ 逃げるおお！！」  
「同意します。逃げましょう」

俺とアイオはそう言ってレンから離れた。

「はあ……まったくあいつらは」  
「3人って仲がいいんですね」  
「いや、僕らは最初敵対していたよ。特にナイトとアイオは」  
「ええ！？ 今、あんなに仲がいいのにですか？」  
「ああ、それはもう。僕が入る隙間なんてない位壮絶なバトルだったよ」  
「……あのお気楽正確なナイトくんがねえ……」  
「君達も気を付けたまえよ。ナイトはまだ力を隠している」  
「大丈夫ですよ。ナイトさんは」  
「まったく、君達のその自身はどこからでてくるのか皆目見当も付かないよ」

レンは髪をぐしゃぐしゃと掻く。

遠くではナイトとアイオがこっちを手招きしている。

「君達……25面の大きなクレーターって見たことあるかい？」

「ええ。あそこは私達が攻略したから」

「ユイも1度だけ見に行きました」

「実はあのクレーターを作ったのはナイトとアイオなんだ」

「「えええ！？」」

「まあ、詳しいことは本人達から言うなって言われてるけどね」

「聞きたい……」

「ま、人つてのはそんなもんだよ。本当の姿なんて誰にも見せないものさ。」

「僕も含めてね」

「お　い。早く、しないと夕飯遅れちまうぞー!!」

「ほら、ナイトが呼んでいる。さっさと行こう」

レンはそう言って2人の元へ1人歩いていく。

カナとユイはその場に立ち尽くして2人だけで会話を始めた。

「ねえ、レンの言っていたことって」

「わかりません。でも、ユイはナイトさんと出会って1日一緒にいて半年間空白が合ってまた1日だけ会って、そこからちよいちよい会っていましたので」

「私もナイトくと会ったのはここ数ヶ月だから……」

2人は互いの顔を見合わせると笑い合った。

「ま、そんな事はいいか」

「はい。ナイトさんはナイトさんです」

2人は手を繋いで3人の元へと走って行った。

## EP10 紅蒼（後書き）

レンの吸っているのはタバコではなくて、電子タバコみたいなものです。

一応、現実世界では20歳になっていますが、ここに注釈を入れておきました。

## Ep11 決戦へ向けて(前書き)

今回は、ボス戦前の日常パートです。

感想、指摘、誤字脱字、評価などお願いします。

## Ep11 決戦へ向けて

次の日。

俺は50面にある、自分の家の戸をゆっくりと開いた。

「ふああああ。眠い」

顎が外れるくらい大きな欠伸をすると、後ろから強烈な打撃を受ける。

「あだっ!!」

「おはよー。ナイトくん」

「いたた　　ん。カナが、いきなり殴ってくんなよ。HP減るだろ?」

「いいじゃないの。スキンシップよ、スキンシップ」

「こんなんがスキンシップなら、いつか俺、死ぬぞ?」

「まあ、そんな細かい話は置いて」

カナは大きく背伸びをすると俺の方を向く。

俺は再び大きな欠伸をすると画面ディスプレイを開く。

「今日、辺りに75面に行ってみるか」

「そうね、何事も速い方がいいだろうし」

「そっだよな」

指を横に引くと画面は消えた。

再び大きな欠伸をするとカナは俺を見て笑った。

「んだよ」

「いや……ナイトくん。可愛いなって……」

「可愛いゆうな!! これでも、少し気にしてんだからな」

「……ご、ゴメン」

「笑うな」

俺はカナの頭にチョップする。

カナのHPが2ほど減った。

「あ、私のHPも減った」

「自業自得だ」

俺は、そう言うと家の中へ入って行った。

「ああ、まってよ。ナイトくん!!」

後を追うようにカナが家に入っていった。

家の中に入ると、見慣れた人達がすでに座っていた。  
俺はコーヒーを入れると、開いている席に座った。

「お前ら、速いな。おい」

「おはようございます、ナイトさん」

「僕は朝早い方じゃないんだけどね。君達が起きているから仕方なく」

「……………ZZZZZZ」

「アイオは寝てるけどな」

「んな!？」

「まあ、そんなこと置いといて早く話を進めよう」

俺は強引に話を切って、コーヒーを飲んだ。  
アイオは半分白目で爆睡している。  
レンは、はぁ、とため息を漏らす。

「さぁ、支度をしたらさっさと行こうじゃないか」  
「ん。あ、そうだな」

俺はそうレンに言うと言画面を開いた。

現在の時刻は午前9時過ぎ

「じゃあ、10時にもう1度ここ集合な」

「了解した」

「わかりました」

「うん。わかったよ」

「zzzzzz」

と、いう事で準備をして集合となった。

と、いう事後、30分後に俺の家に集合となった。  
ってか、まずなんで俺の家に集合なんだろうと不思議に思う。

「ナイトくん、どうしたのかな？」  
「いや、なんでもないよ」

少し不機嫌になっていたのかな……  
カナが心配そうに顔を乗り出してきた。

「それで、後30分くらいはヒマだけどこへ行きますか？」

「ん。いいけど、どこ行く？」

「んー。この街は見慣れてるから、別の所に行ってみた気もする」

「そうか？　なら、久しぶりにR*リオ*の所にも行ってみるか？」

「リ、リオ……わねえ」

「ん。どうかしたのか？」

「リオは今、ちょっと」

「今？　どこか、調達でも行ってんのか？」

「そ、そうなの！！　リオはちょっと調達に行っていて今はいないんだよ」

激しく荒立てて何かを誤魔化そうとしているカナ。

何か、よっぽど隠していたのか、それ以上は聞かなかった。

「そ、そうか？　なら、近くの喫茶店で時間でも潰すか」

「う、うん。そうしようかな」

「じゃあ、行くか」

俺はカナを連れて喫茶店へと入って行った。

ユイは2人の後をこっそりと着けていた。  
ユイの内心は心底荒立っていた。

( いったい、あの2人の関係はなんなんでしょう？ 出会ってからまだ1年も経ってないのに、あんなに仲良さそうに )

2年前にナイトに助けて貰ったあの時からユイは彼の事が気になっ  
っていた。

バーチャル 仮想空間の中であるが、きっとこれは恋なんだろうと彼と最初に  
別れた時に気づいた。

17面で会った半年後の彼は少し何かが変わった 気がす  
る。

暗かった……と言うか、上手くは説明できない感じだった。

心の底から出した最後の1言も彼は断ってしまった。

彼が半年間に何があったのかはいまだに知らない。

そしてその後はちよくちよく会っていたけれど、雰囲気は格段に  
変わった。

何というか、1言では表せないけど、簡単に言うと落ち着いたと  
思う。

( ユイは絶対に諦めませんからね!! )

心の中でそう呟いた少女は2人の元へ駆け寄って行った。

『グレムリンマジシャン紅蓮の魔術師』のレンと『トライデントボセイテン蒼穹の三叉戟』のアイオは近くの喫茶店にいた。

レンは無表情でコーヒーを飲んで、アイオは超巨大パフェを食べていた。

「で、僕ら本当に協力するのかい？」

「ぐうう　　ッは！？　何故、目の前に巨大パフェが！！」

「……今の今まで寝てたのかね君は。そんなんでよくパフェを頼んだね」

「否定します。私は甘い物が大好物です」

「それは、理由になってないと思うんだけどな」

巨大パフェを、みるみる減っていった。

レンはそれを驚いた表情もせず、ただ普通にコーヒーを飲んでいった。

「話ってなんですか？」

「聞いてなかったのかい、君は？」

「はい」

「断言したね　　僕らは本当に彼に着いて行くのかい？」

「ナイトですか？」

「そうだよ」

「私は過去にナイトに借りを作ってしまったから、借りは返さないといけない」

「そうだね。君がやるなら僕もやるよ。パートナーだからね」

「一応ですよ。あ、巨大パフェおかわり」

「一応ね……。まだ食べるのかい、君は？」

手を挙げて巨大パフェをおかわりする。

レンはため息を付くと、自分もコーヒーを頼む。

「決戦へ向けて、体力の回復をしておかないといけませんから」

「パフェを食べても、体力は回復しないと思うけれどね」

「否定します。内心メンタルの回復ができます」

「・・・そうだね」

「あ、あれはナイトじゃないですか」

「そうだな……。カナとユイもいるじゃないか」

「三角関係。興味深いですね。やっぱり……」

パフェを食べ終わったアイオはスプーンを口に入れながら外を見ている。

レンはふっとため息をつくと外のナイト達を見て

(僕らも十分、三角関係だと思うんだけどな)

ナイト達は来店後、レン達を見つけて結局は5人で時間を潰すことになった。

俺は黒いマントを羽織り、オーダーメイド特注の剣を腰に付けると景気よく立ち  
上がって

「さあ、行こうぜ。死と隣り合わせの戦場へ」

## Ep11 決戦へ向けて（後書き）

次回は戦闘パート

あるかなあ。

出来れば、ボス戦は2回くらいに分けたいと思っています。

感想、などお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9155z/>

---

デッドオブオンライン

2012年1月6日18時48分発行